

---

# 花龍～かりゆう～

山埜ロン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花籠／かりゆう／

### 【ZPDF】

N5151D

### 【作者名】

山埜ロン

### 【あらすじ】

亡くなつた祖母の家で出会つたのは、香りと記憶と幻？

## 独り、起きる。

…肌寒い。あまり慣れない寝床に目を覚ます。廊下の窓から入る月明かりは、部屋の障子を透してなお、ほのかに蒼く冴え渡る。

「今、何時位だろつ……？」

寝返りをしつづながら、ぼんやり辺りを見回す。

そうだ。この部屋には時計が無いんだつた。

春らしい陽気にはまだ程遠い時期に、田舎の祖母が他界した。つい先日まで、暖かくなつたら花見や山菜採りに行くという話をしていたのに…。家はかなり山奥にあり、遠方の旧い知人の方々が後から来る事が多いというので、しばらくの間祖母の家に滞在し、来客対応と遺品の片付けをする事になつた。

古いアルバムや先に亡くなつた祖父の本を眺めつつ

「祖母の生活」があつた空間を片付ける。遠くに離れ、死に日に会えなかつたせいか、未だに実感があまり湧いていない。作業をしながら、そのギャップを自分なりに埋めているのかもしれない。

片付けていて気が付いたのだが、家の中で時折ふと何かの良い匂いがした。

最初は、遺品の中に香水か香袋もあるのかと思つていた。しかし、いつこゝにそれらしき物は見当たらない。まあ、元来祖母はそいつた物を身に付ける趣味は持ち合わせてはいなかつたが…

芳香剤や線香とも違う。もつと…自然な何か。少し鮮烈な、甘

い香り。どこかで嗅いだ記憶があるような懐かしさもあるが、はっきりとは解らないままだった。

## 独り、起かる。（後書き）

これは、半分フィクションで半分ノンフィクションです。どの部分が体験かは、ご想像にお任せします。

## 闇に浮かぶは

…また、あの香りだ。

暗い中、上半身だけカタツムリのよう布団から出して時計代わりの携帯を「」そこそ探しながら、鼻腔をくすぐる香りに気が付いた。気のせいか、昼間よりも強く感じる。

「携帯…鞄の中か？」

鞄を部屋の隅に置いた事を思い出し、嫌々ながら布団から出るべく起き上がった

「え？」

起き上がる最中、視界の端に違和感を感じた。部屋の暗闇とは違う、何か。

部屋の一番奥の、床の間に当たる位置を見つめる。確かに、恵比寿と大黒の置物があつたはず。月明かりが反射したのか？

…違う。

だんだん慣れてきた目は、置物よりも明らかに大きく浮かび上がる「それ」をとらえていた。

床の間の中央。

「それ」は、少し宙に浮いた状態で留まっていた。大人が両手を広げた位はあるだろうか。まるで、水晶の彫刻のように輪郭が浮き出て見える。鱗で覆われた、蛇よりも大きな…

「…龍？」

不思議と恐怖感は無かつたが、夢なのか現なのか区別がつかない状態にただただ戸惑う。

呆然と眺めていたが、

「それ」と田が合つた瞬間、視線を動かせなくなつた。そして。

「ふ、うわっつ！？」

家の、閉め切つた部屋の中で、突然息苦しい程の突風に襲われた。思わず瞼を固く閉じ、身体を丸めるようにしてみたが、あつという間に宙に巻き上げられていく。

一体、何処へ？

頼むから、夢であつて欲しい…空間の渦に吸い込まれながら、そんな事をグルグル考えていた。

## 陽射しの下、君は。

眩しい。何だか良い匂いもするし。天国にでも運ばれたかな?

ザザツ。

あ、なんかチクチクする。天国じゃないっぽい。

そつと田を開けると、芝生の上にいた。辺りをよく見ると、噴水や花壇らしき風景があり、ここが公園らしい事が解った。  
とりあえず、ケガはしていないけれど…混乱を通り越して、ぼうつとする。どうしたもんだか。良い天気だし、昼寝でもしようか。

「…~日に、家に戻る事になりました。」

誰か来る。慌てて、茂みの中に隠れる。声の主らしき女性は、男性とゆっくり歩きながら、うつむき加減に何か話している。二人とも学生らしき格好…

「え?」

あれは、写真の中に居た彼女。

若かりし頃の、祖母だ。そんなまさか。男性の方は、祖父とは似ても似つかない。誰だ?

気付かれないうちに、彼女をじいっと見る。何度見ても…やはり女学生時代の祖母だ。まだあどけなさの残る祖母を田の前にするといつのは、この上無く妙なもんだ。

「父に、見合いをするよう言わされました。恐らく、そのまま結婚させるつもりでしょう。」

梅の花の下、どこか重く呟くようにそう言った。確かに、祖父とは見合い結婚だったがこれは…

「せっかく、看護婦になる為の入学試験も通ったのに……やつと、自分の生き方を見付けたと思えたのに。何より、貴方と離れなければならぬなんて…」

「泣くもんじや無いよ。何も、君の命を奪われるわけではないんだ。」

「男性が、目を潤ませた彼女に穏やかに話し掛けた。

「君は、何処にいても唯一の君なんだ。どんな環境でも仕事でも、微笑む事を忘れなければ君らしく生きていける。…微笑んで生きて欲しいんだ。これは、僕のわがままな願いだ。」

その人は、静かに淋しげな笑みをたたえながら語り続ける。

「ただ、時々でいい。便りをよこして欲しいんだ。君の書く字も文章も、君の温かみがよく出ていて、読むとほっとする。勿論、無理にとは言わないよ。」

「ええ、必ず書きます。私も貴方の文を読むと、とても穏やかで清々しい気持ちになりますから。」

「…この花。」

「え？」

「梅の花で押し花でも作って、手紙に入れるよ。」

「じゃあ、互いに交換しましょうね。」

若く、想い合つ二人の会話は…言葉少なに、どちらか力強く終わつた。

そして。

「わっつ、また、この風！？」

小さな竜巻は、容赦無く舞い上げてくれた。

## 残り香

どれ位経つたのだろ？。もう、外から差し込むのは月光では無く、朝日に変わっていた。

「…はあ。何だつたんだろ。」

長くややこしく、甘酸っぱい夢…といつ事にしたかった。でも、この惨状は？

部屋の中は、本も服等の自分の荷物もぐぢやぐぢやに散らばり、掛け軸は落ちて、押し入れの襖は外れていた。おまけに…大量の、小さな花びら。白い梅の花びらが、部屋中至る所に貼り付いていた。やつと我に返り出た言葉は、

「あー…掃除大変だな…」

あれから結局、眠る事は出来なかつた。まあ、当然だけど。花にまみれながら、散乱した物をマイペースに片付けていた。

「あー、こればあちゃんの古い着物かな？」桐箪笥も相当揺れたらしく、引き出しもいくつか開いた状態になつていた。色とりどりの、小紋や訪問着。着物を入れ直し引き出しを戻そうとしたが、何かにつつかえた。

見ると、奥に紙の束らしき物が。引っ張り出すと、それは沢山の手紙と押し花のしおりだつた。白梅：既にセピア色になつたそれからは、あの香りはするはずも無かつた。

結局、あれは何だつたんだろ？。最後に、気持ち良さそうにどこかへ飛んで行つた龍：眠らせた恋心の名残なのか、それともあの一人を見ていた梅の古木の精だつたのか。

いずれにしても、祖母が亡くなる事によつて解き放たれたんだろ？。

「まあ、ばあちゃんもこの女だつたってわけだ。」

乙女心の威力たるや、時をも越える…か。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5151d/>

---

花龍～かりゅう～

2010年10月26日06時32分発行